シ玉フ、寛永元年、愛本ノ橋ヲ架ラレテヨリ以後ハ、行旅ノ患ナシ、

〔東遊記二〕九十九橋

高くして奇なるは、越中の相本の橋なり、

〔千種日記〕磯傳の道を經て片貝川を渉り、三日市浦山などいふ所を過て、相本といふ所に到て、黒部川の橋を渡る、長きこと三十三間、高きこと七八間あるべし、川岸の岩より組出したる刎橋なり、昔此橋を掛ざりし程は、爰より下を渉る、其所を四十八瀬といふ、

〔遊嚢賸記二十四〕黒部川ハ立山群谷ノ衆水ナリトイフ、四十八瀬ノ路洪水トテ、浦山通愛本ノ橋ヘカヽリ、亂流逆潮ノ勢ヲ大觀シ、明日舟見、湯川泊ナド打過テ宮崎ニ至ル、

〔増補地名便覽周防名所〕錦帶（センタイ）橋

〔倭訓栞前編二十四波〕はし○中略　防州岩國に錦帶橋あり、錦山より流るゝ川にかゝる故に名く、日本第一の風景其結構比すべきなし、俗にそろばんばしといふ、よて俗に山は富士、瀧は那智、橋は錦帶といへり、

周防國錦帶橋

〔西遊雜記一〕錦帶橋は世に名高き橋にて、能たくみし懸やう也、相傳ふ、吉川監物殿といひし人今の城主より四代以前まで、此橋かゝりて百二三十年計と土人物語也、の工夫にて懸はじめ給ふといふ、川の流れ強き故に、橋杭ほれ流れてもたず、此故に水底を切石を以て三重にたゝみ、橋臺も切石にて劒先につみあげ、敷石も橋臺も石の杖杵にて、ことゞくくとぢて一石の如くにつぎ合て、橋臺に深き穴をほりて、其穴へ鐵のはしらを入、かくの如くさしこみ、左右ゟ其鐵の端と端とへ木を渡して取立しもの也、下に行て見るに、鐵をば木にてつゝみてあれば、上のかたへは少しも見えず、尤橋掛替の時は、幕を引廻して、人の見ぬやうにしてかけかへる故に、所の者にても委しくは去らず、予は故ありて此町に知れる人の方に止宿して、能々聞正したる事也、秘し給ふべき事にあらず、是程の工風は、智あ